



258号
2020/11

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



ギャロン・チベット族の少女：丹巴南部に在る新石器時代から人が住む緩斜面の丘の石塔が林立する集落で見掛けた、西域風の顔立ちが印象的な女の子でした。近くに在る民族小学校の行事で目に留まり、先生に「撮影させて下さい」とお願いし実家に案内して貰った所、晴着姿で撮影に応じてくれました。

(四川省丹巴県にて 2006年2月 姑娘山自然保護区管理局特別顧問=大川健三)

'わんりい' 2020年11月号の目次は20ページにあります

今月のももの、日本で使われる四字成語の中には入っていません。最近は、「あつけにとられる」という意味で使われることがあるようですが、本来の意味ではありません。

・>・>・>・>・>・>・

昔、闘鶏の好きな王様がいて、闘鶏を訓練する名人と言われた紀子という人に自分の鶏を強い鶏にするよう頼みました。紀子は毎日忙しく働いていましたが、王様の鶏に特別訓練をしているようには見えませんでした。王様は待ちきれずに「私の鶏の訓練はどんな具合だ？」と訊きましたが、紀子の答えは「まだ、もう少しかかります」でした。

また何日かして王様はまた訊きました。紀子の答えは「まだ訓練は完成していません」でした。王様が待ちきれなくなったころ、紀子がやって来て王様に言いました。「王様の鶏の訓練が終わりました」紀子が抱いて来た鶏は、あまり動かでくず木偶の坊のようで、強そうではありません。王様はがっかりしましたが仕方ありません。その鶏を闘鶏場に連れて行き土俵に乗せると、相手の鶏は怖がって戦おうとせず、王様の鶏は3試合も続けて勝ちました。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味：呆＝愚か者、ぼんやりしている；呆得像木鸡一样＝恐れ、驚き、ぼかんとする様子

使用例：目の前で自動車事故が起きたので、彼はびっくりして固まってしまった。

・>・>・>・>・>・>・

このお話は「莊子・達生篇」に出てくるお話です。子供用に簡単にしてあるので、かえって分か

りにくいですね。

戦国時代には、一時期闘鶏がはやっていました。王様とは斉王、闘鶏訓練の名人（この本では「紀子」と言っていますが）は紀渚子と言ったそうです。斉王が初めに鶏の様子を訊いた時、紀渚子は「戦う気が満々で、まだ訓練が足りません」と答えています。次に訊かれたときは「だいぶ落ち着いてきましたが、まだ相手に向かっていく気があり、訓練は十分ではありません」と答えています。

40日が過ぎたころ、訓練が十分できたと紀渚子が連れて来た時、鶏はまるで木彫りの鶏のように動かずボケっとしていました。しかし闘鶏場では相手の鶏が、その鶏の内面に秘めた闘志と機敏性に恐れをなして、逃げ出したり負けを認めたりして、斉王の鶏は向かうところ敵なしでした。

「木鶏」という言葉、今では「あつけにとられる」とか「ぼかんとする」といったあまりよくない様子を言うのに使われますが、本来は「自信があつて、少々のことには動じない」という良い意味でした。ここでは勿論、その意味で使われています。

莊子と言えば、老子と共に道家思想を深めた人で、その書物「莊子」も難解な本として知られていますね。そんな本からは、このお話のほかに、「螻蛄窺蟬」と言とうろうきせんって、セミを狙うカマキリがトリに狙われ、そのトリもまたヒトに狙われているお話（目先の利益に捕らわれると危険だとの教訓）も有名です。一見子供向けのお話のようである、その奥で人生の機微を示しているのが中国文化の魅力でしょうか。



挿絵満柏氏

孟浩然の五言絶句二首

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

今回は孟浩然の五言絶句二首を取りあげました。

[訓読]

けんとくこう しゆく もうこうねん
建徳江に宿す 孟浩然

建徳江に宿す

もうこうねん
孟浩然

なぎさ ふなやど
霧の渚の船宿り
くれ う
暮ていや増す旅の憂さ
こうや た
広野の樹々に天垂れて

えんしよ ぼく
舟を移して煙渚に泊す

にちぼかくしゅう
日暮客愁新たり
のひろ てん き た
野曠く天は樹に低れ
こうきよ
江清く月は人に近し

月は間近に水清し

孟浩然は河南・襄陽の人。後世、王維と並び称される盛唐の大詩人です。都では王維のほか賀知章など多くの詩人達と交友を結びました。青年時代、仙人や任侠の世界に憧れ、各地を転々としながら、当時四川から出てきたばかりの若い李白とも意気投合しています。40歳にして初めて科挙の試験を受けますが失敗。生涯、役人生活とは縁がありませんでした。

[原詩]

しゅん ぎょう もうこうねん
春 曉 孟浩然

chūn xiǎo mèng hào rán
春 曉 孟 浩 然

春はのったり朝寝坊
小鳥の声がチュンチュクチュ
思えば夕べのあの嵐
花がどれだけ散ったやら

chūn mián bù jiào xiǎo
春 眠 不 觉 晓

chù chù wén tí niǎo
处 处 闻 啼 鸟

yè lái fēng yǔ shēng
夜 来 风 雨 声

huā luò zhī duō shǎo
花 落 知 多 少

『春曉』と言えば日本では最も有名な漢詩の一つですね。内容も簡単で、わざわざ翻訳するまでもないとは思いますが、原意にそった上で、あえて戯れ歌風にアレンジしてみました。

[訓読]

もうこうねん
春 曉 孟浩然

しゅんみんあかつき
春 眠 曉 を 覚 え ず

しよしよていちよう
処 処 啼 鳥 を 聞 く

やらいふうう
夜 来 風 雨 の 声

お たしやう
花 落 つ る こ と 知 る 多 少

[原詩]

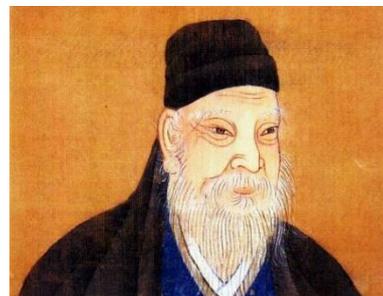
sù jiàn dé jiāng mèng hào rán
宿 建 徳 江 孟 浩 然

yí zhōu bó yān zhū
移 舟 泊 烟 渚

rì mù kè chóu xīn
日 暮 客 愁 新

yě kuàng tiān dī shù
野 曠 天 低 树

jiāng qīng yuè jìn rén
江 清 月 近 人



孟浩然(百度百科より)

今日のお題は盛唐の詩人、岑参の『磧中の作』と『入京の使に逢う』という作品でした。

岑参は715年、代々官僚の家に生まれ、各地を転々として育ちます。744年に科挙に合格しました。この年は李白が朝廷を追放され、流浪の旅に出た年でもありました。李白はその旅の途中で杜甫と出会い、親交を深めます。この時、岑参も一緒にいたそうです。「同時代の李白や杜甫があまりに有名なので、ややインパクトが弱いですが、『唐詩選』に28首も入っている詩人で、杜甫との因縁も深かった人物です」と植田先生。

玄宗皇帝は在位期間の前半は則天武后とそれに続く韋皇后の専制による朝廷内の混乱を治め、王朝文化の隆盛に大きく貢献しましたが、後半は楊貴妃に狂って、治世から興味を失ってしまいました。玄宗の覚え目出たかった李白が追放されたのも、楊貴妃に嫌われたからだといわれています。

さて、岑参は当時西域で軍事的実権を握っていた安西節度使・高仙之の幕下に書記官として赴任するなど、長く辺境の地に駐屯していました。

安祿山の乱が起こった757年に、玄宗皇帝の後を継いだ肅宗の行在所鳳翔に馳せ参じ、そこで杜甫と再会します。杜甫の推挙で右補闕という役職に就き、その年の10月に肅宗に従って長安に帰還します。2年後の759年には、嘉州(四川省樂山市)の刺史となります。768年、官を辞して故郷に帰ろうとしましたが、途中で反乱軍に阻まれて、成都に留まり、770年、杜甫と同じ

年に56歳で亡くなっています。

戦地に10年以上もいたので、その詩は悲憤慷慨するところあり、と言われますが、作品をみると激情に駆られるというより、落ち着いた人柄を感じさせる表現です。同時代の人にも「識度声遠、議論雅正」つまり、知識が豊かで、声望があり、議論は上品で且つ公正であった、という評判だったそうです。

「この人はね、不遇だけど、自分が不遇だ、不遇だと愚痴は言わないんですね。杜甫のように感情をむき出しにしません、かと言って実生活では要領がいいかと言うと、やっぱり不器用なんですよ。その点では杜甫と共通する所があります」と植田先生。

403首が現存し、そのうち70首あまりの辺塞詩を残しています。

では、『磧中の作』から見てみましょう。

qì zhōng zuò
磧 中 作

cén cān
岑 参

zǒu mǎ xī lái yù dào tiān
走 马 西 来 欲 到 天

cí jiā jiàn yuè liǎng huí yuán
辞 家 见 月 两 回 圆

jīn yè bù zhī hé chù sù
今 夜 不 知 何 处 宿

píng shā wàn lǐ jué rén yān
平 沙 万 里 绝 人 烟

せきちゆう
磧中の作
しん しん
岑参

馬を走らせて西来天に到らんと欲す
家を辞して月の両回円かなるを見る
今夜は知らず何れの処にか宿するを
平沙万里人煙を絶つ

「磧」とは、砂漠のことで、「磧中の作」とは砂漠で詠んだ詩という意味です。

馬を走らせて遠く西域の地までやって来ると、まるで天に至らんとするようだ。家を出てから、満月が二回巡り来て、ほぼ2ヶ月が過ぎた。今夜はどこに野営するのかまだ分からない。見渡す限りの砂漠で、どこまで行っても人家は見当たらない。

その昔、地平線が広がる砂漠の果ては天につながっていると思われていました。李白の詩にも「黄河の水、天上より来る」(『将進酒』)という表現があります。

「従軍している人の日常をそのまま描いた詩ですね。作者自身は書記担当の文官だけど、故郷を離れた兵士たちの気持ちを頭に入れて書いたと思われまます。派手さはないですが、非常に現実的です。また、現代標準音で読み上げると音の響きが素晴らしく、起承転結も見事ですね。辺塞詩は都にいて、辺境の地を想像して書いたものがほとんどです。例えば王翰の『涼州詞』、「葡萄の美酒、夜光の杯」なんて、沙漠の果ての戦場でそんなことあるかいッ！ て感じがしますね。詩の表現としては面白いけど、現実味がありません。それに比べると、この詩は淡々と綴っているようで、逆に現実味が伝わってきますね」と植田先生。

qì zhōngzuò shǐ
逢入京使

cén cān
岑参

gù yuán dōng wàng lù màn màn
故园东望路漫漫，

shuāngxiù lóngzhōng lèi bù gān
双袖龙钟泪不干。

mǎ shàng xiāng féng wú zhǐ bǐ
马上相逢无纸笔，

píng jūn chuán yǔ bào píng ān
凭君传语报平安

次の一首を見てみましょう。

入京の使いに逢う

岑参

cōu ēn hū gāng shì mǐ chí mǎn mǎn
故園東に望めば路漫漫たり

sōu shū yǒu yǒu shì yǒu nǎ mǐ dá kā wǎ
双袖龍鐘として涙乾かず

mǎ shàng xiāng féng wú zhǐ bǐ wú kù
馬上に相逢うも紙筆無く

jūn yǐ yǒu yǔ bào píng ān
君に憑りて語を伝えて平安を報ぜん

都長安のある東の方を望むと道は遥かに遠い。都で暮らす家族のことを思うと、衣の両袖が涙でぐっしょり濡れてくる。都に帰る馬上の人と会ったが、急場のことで手紙を書く紙も筆もない。そこで貴方に頼む。伝言を託すから、元気であると口頭で家族に伝えて欲しい。

「龍鐘とは、老いさらばえた姿や、衣服がびしょ濡れになる時など、なんとなく惨めな様を表す言葉ですね。両袖が涙でビショビショとは大袈裟な表現ですが、まあ、白髪三千丈に比べたらね。このくらいなら日本人が許せる範囲かな」と植田先生の解説に一同から笑いがもれました。

この詩は戦場の人(作者自身)が、使いの人に言伝を頼んだシーンを詠んでいます。帰りたくても帰れない、手紙を託したくても、紙も筆もな

い。そういう悲惨な気持ちが届くほど伝わってきますね。使いの人は特に親しい友人でもないでしょうから、家族にわざわざ言伝を伝えてくれるかどうかは分からなかったでしょう。しかも託された人が長安まで辿り着けるかどうかもわからない。それでも言伝を託さずにいられない切なさが届くほど伝わってきます。

一説には、この時岑参は長安に美しい妻を残していたといわれています。若く美しい妻が今どうしているかと思うと、両袖が涙でびしょ濡れ…、という表現もさほど大げさではないですね。文章や詩には作者の性格がにじみ出るものですが、私は岑参の詩から、まじめで誠実、曲がったことができない、等身大で生きることを潔しとする人柄を感じます。

さて、岑参の詩は、以前にも取り上げられています。重複になりますが参考までに記しておきます。これは旧暦9月9日、重陽の節句に、都から数百キロの西方に位置する肅宗の行在所・鳳翔に在って、戦禍に荒れ果てた都に暮らす人々のことを気遣いながら詠んだ作品です。

xíng jūn jiǔ rì sī cháng ān gù yuán
行軍九日思长安故園

cén cān
岑参

qiáng yù dēng gāo qù
強欲登高去

wú rén sòng jiǔ lái
无人送酒来

yáo lián gù yuán jú
遥怜故園菊

yīng bàng zhànchǎng kāi
应傍战场开

xíng jūn jiǔ rì sī cháng ān gù yuán wú xiǎng
行軍九日長安の故園を思う

cén cān
岑参

強いて高きに登り去かんと欲するも

人の酒を送り来る無し

はる
遙かに憐れむ故園の菊
まさ
応に戦場に傍いて開くべし

以上三首を並べてみた時に、同じ辺塞詩でも、バラエティに富んでいる気がしますね。「派手さはないけれど、人の心にジワッと浸み込むものがありますね。漢詩はパッと読んだだけだと、なかなか良さが分からないのですが、作者の体験した人生に自分の人生を重ね合わせてみると、なるほどなあ、と思えますね。岑参は56歳で亡くなったわけですが、私は自分のこの年の頃を思うとまだまだ若造だったと思います。昔の人は、短くとも濃密な人生を送っていたので、私などはこの歳になって、やっとこの詩の良さが分ったような気がします。皆さん、漢詩を深く鑑賞するには長生きした方が良いですよ、長生きするほど良さがジワジワと迫ってきますからね」と植田先生。

アラフォー女子もいよいよ来年からは、五十の大台に乗ってしまいますが、植田先生の「まだまだ若造」というお言葉を聞いてちょっとホッとしています。今更ながら自分の未熟さ、知らないことの多さを痛感する日々ですが、生きている限り、ほんの少しでも成長し、他者の人生も含めて深く味わえる大人になりたいと思います。



赴任の別れ道・岑参（絵・謝振甌）（搜狗百科から）

4回目の今回は、「虞美人」(虞姫とも呼ばれる)について書いていきたい。9月号の2回目で、四大美女について「貂蟬」は実在の人物ではないので代わりに「虞美人」を入れて欲しいと書いた。とはいうものの彼女については、司馬遷(BC145年?~BC86年?)の史記の「項羽本記」に四面楚歌のシーンでほんの数行書かれているだけなので、果たしてそれでいいのか自信はない。むしろ「卓文君」にした方がいいかもしれない。「卓文君」はいずれ紹介する予定) 虞美人は、生まれた年も出身地も分からなければ如何なるいきさつで項羽のパートナーとなったのか、また四面楚歌の重囲を打ち破って項羽は討ち死にしたが、彼女は果たして死んだのか、落ち延びたのか、それについては司馬遷は何も書いていない。いくつかの資料には亡くなったのは項羽と同じBC202年としているものもあるがはっきりしない。項羽の出身地は、江蘇省の宿遷市であるが、虞美人もそのあたりの人だったのかもしれない。

手元に陳舜臣が書いた「小説十八史略」がある。この本には虞美人について次のように書かれている。《虞姫は会稽(浙江省)の女性である。項羽が江東にいた頃から寵愛した女で、彼は遠征の軍中にも彼女をそばから離そうとはしなかった》とある。小説なので別に構わないが、会稽の女性であるという何かそれらしい記録でもあったのであろうか? 我々が虞美人に持つイメージは、後世の人々が項羽(BC232年~BC202年)と劉邦(BC256年~BC195年)の覇権争いの中で悲劇のヒロインに涙し、想像を膨らませ説話を作り上げたものに拠っていると見えよう。特に近年になって京劇の格好の題材になり「梅蘭芳」という不世出の役者によって形作られたのではなからうか。小説やドラマで格好の材料になったのは間違いないである

う。劉邦の妻である「呂后(呂太后、呂雉)」が中国三大悪女であることも、虞美人に庶民は肩入れしたのかもしれない。

では、司馬遷はどのように彼女を描いているのであろうか。四面楚歌のシーンで次のように書いている。

〈有美人、名虞。常幸従〉(美人あり、名は虞。常に幸せられて従う)という部分と、項羽が陣営の中で酒を飲みながら次の有名な歌を歌う所である。〈歌数阕、美人和之〉(歌を歌うこと数回、美人これに和す)

また有名な歌とは次の「垓下の歌」である。

力拔山兮氣蓋世 (力山を抜き 氣世を蓋う)
時不利兮騅不逝 (時利あらず 騅逝かず)
騅不逝兮可奈何 (騅の逝かざる奈何すべき)
虞兮虞兮奈若何 (虞や虞や若を奈何せん)

ここからは後世の説話である。まず彼女の姓は虞で、名は妙弋(ピンインは、miào yì)、出身地は江蘇省だとする。武人である兄が項羽の武将となったのが縁で項羽に見初められたというものである。その彼女が最後の夜、項羽と何度か歌った後自分の想いを漢詩によせたのが次の詩である。

漢兵已略地 (漢兵 已に地を略し)
四方楚歌声 (四方 楚の歌声)
大王意氣尽 (大王 意氣尽き)
賤妾何聊生 (賤妾 何ぞ生を聊んぜん)

虞美人はこれを詠んだあと、項羽の足手まといにならないよう、また自分の貞節を全うするために刀で首の頸動脈を切って果てたのである。

さて、更に庶民の想像は広がっていく。その時



梅蘭芳演じる《霸王別姫》（中国サイト「搜狗」より）

大地に流れた血のあとに翌年赤い色のひなげしの花が咲いた。これを見た人々はひなげしを虞美人の生まれ変わりとして見て、以降ひなげしを「虞美人草」と呼ぶようになったという説話である。素敵な名前を付けてもらってヒナゲシも喜んでいと思う。日本では、ヒナゲシを雛罌粟と書く。花のイメージと違って随分固い文字を当てたものだ。罌という字はネットに掘れば「口が小さく胴が膨らんだ形をした瓶」の意味だそうだ。ポピーとも呼ばれるヒナゲシは、フランス語では、〈コクリコ〉、スペイン語では、〈アマポーラ〉と呼ぶ。「アマポーラ」という題名の曲があるが、私の大好きな曲で、スペインのホセ・ラカジェが作曲し一世を風靡した名曲である。今年の2月に行われた“わんりい新年会”で会員の福島さんのフルート演奏をご記憶の方も多と思う。

ところで「虞美人」と言えば、京劇の「霸王別姫」を思い出す。ご存知、項羽と劉邦の「楚漢の戦い」において四面楚歌の声の中、項羽と虞美人の別れの場面に涙した方も多いのではないかと思う。BC202年12月に起きた戦いであるが、劉邦率いる30万の漢軍に対し、項羽軍は10万であった。項羽はよく戦ったが〈垓下〉に追い詰められたのである。垓下は今の安徽省宿州市靈壁県で安徽省の北部にある。

「四面楚歌」を耳にした項羽が歌う

〈力はヤマを抜き 気は世を蓋う・・・虞や虞や
汝をいかんせん〉

の垓下の歌は気迫に満ち、項羽の悲憤慷慨の激情を余すところなく観客に伝える。また虞美人の「剣舞」は本劇の最大のシーンである。この「霸王別姫」は、「四大名旦」のひとり、「梅蘭芳」（1894年～1961年）の代表作ではなかろうか。虞美人の「剣舞」や華麗な衣装などは、梅蘭芳の創出になるものだろう。

前段で虞美人の出生地や亡くなったのはBC202年なのか、どこかに落ち延びて穏やかに余生を送ったのかは明確ではないと書いたが、彼女のお墓も古文書から幾つかあり特定できていない。いずれの資料も「垓下の戦い」の場所から近距離の所であるらしい。

最後に、本シリーズの1回目で三大悪女は、書かないと言ったが項羽と劉邦のそれぞれのパートナーなので呂后（呂太后、呂雉）（BC241?～BC180年）について少し触れて本稿を終わりとしたい。彼女は虞美人と違って劉邦の正妻である。呂雉は、単父（現山東省・単県）の有力者・呂公の娘として生まれた。ある時呂公の宴席に沛県の亭長であった劉邦が挨拶に出向いたとき、人相見を特技にしていた呂公は一目で彼はただ者ではないと見抜き、箱入り娘の呂雉を劉邦に嫁がせたという。彼女の人生の前半は結婚後苦難に満ちた生活を送ったらしい。項羽の人質になっていた時期もある。ようやく漢帝国が樹立してついに皇后となる。しかしBC195年に劉邦が没すると、これまでの鬱憤を晴すかのように劉邦の側室の戚夫人が生んだその子、如意を毒殺し、戚夫人も残酷な方法で亡き者にするなどありとあらゆる悪事を重ねた。人間の本性は、かくも業の深いものなのか、なぜこのように物を処分する如く人を殺めることが出来るのか！と思わざるを得ない。（続く）

「三国志」と河南省

文と写真=村上直樹

今回、主にお話したい内容に入る前に、前回の河南大学について補足を1つ。金明キャンパスの西門を入ると真正面に巨大な新図書館が見える。この図書館の8階には2009年10月に河南省と河南大学が共同で設立した「中原発展研究院」が入っている。その設立に尽力したのは河南大学の元経済学院院長で「中原発展研究院」の初代院長であった耿明齋教授である。耿院長の下、同研究院はまさに中原の発展に資する研究・教育を推進し、書籍の出版、講演会の開催、現地調査の実施等多彩な活動を通じて、河南省および省内各地方政府や企業等に対してさまざまな提言を行っている。2020年1月5日には同研究院の設立10周年を記念する会が（実際に人を集める形で）盛大に執り行われた由。誠に慶賀に堪えない。

ここからは、時代を1800年ほど遡って「三国志」（あるいは「三国志演義」と河南省の関係について、私がいささかでも「体験」することができた範囲でお話することにしたい。言うまでもなく、河南省は「三国志」物語の中心地域の一つであり、私が知るのは「三国志」の中の河南省のごくごく一部分に過ぎない。なお、ここでは慣例にしたがって14世紀に羅貫中らかんちゆうが書いた小説「三国志演義」を指して「三国志」と呼んでいる。この小説には3世紀末に歴史家・陳寿ちんじゆうが著した正史「三国志」等には記述のない、創作部分も多いそうだが、もとよりにわか勉強の私には創作か史実かの区別は曖昧である。

まず、河南省に数ある「三国志」ゆかりの名所旧跡の中でも代表的なものの1つはやはり「官渡の戦い」の史跡であろう。これは建安5年（西暦200年）10月に起こった戦いで、曹操はここで袁紹えんしやうを破る。この戦いは三国志時代における小が大を制した2つの典型例と言われている。因みにもう一つは「赤壁の戦い」である。こちらでは、圧倒的に大であった魏の曹操が小の呉しゆうゆの周瑜に敗れている。

官渡古戦場は現在の河南省鄭州市中牟県の辺りとされており、今では立派な記念施設があるらしい。「らしい」というのは、残念ながら私はまだ実際見学したことがない。中牟県は鄭州国際空港（鄭州市新鄭市に所在）から開封市に入る高速道路の途中にあり、

私も何回か車中から「官渡古戦場跡はこちら」といった標識を見ていた。いずれ見に行くこともできるだろうと思っていたところ、鄭州国際空港から開封市まで高速鉄道が開通したためそちらを利用するようになり、機会を逸してしまった。後悔している次第である。

河南省に縁があるのは魏の曹操だけではない。蜀の劉備にとっても重要な地である。現在の河南省南陽市臥龍崗がりようこうには三国時代の名軍師・諸葛亮（諸葛孔明）を祀った祠、南陽武侯祠がある。私がこの南陽武侯祠を実際見学したのは2012年2月21日のことである。総面積200ム一（約13.3万平方メートル）余りの敷地内に、諸葛亮、劉備を中心とした塑像をはじめ「三国志」由来のさまざまな建築物、文物、額などを配置している。なお、武侯祠とは諸葛亮の爵位が「武郷侯」であり、死後の贈り名が「忠武侯」であることからつけられた名称で、中国各地に10か所近く存在する。中でも一番知られているのは、やはり、成都（蜀の中心地）にある武侯祠であろう。私がいずれ、成都武侯祠を見学したのはかなり以前の2005年3月7日である。この成都武侯祠には劉備の立派なお墓もあった。

話を南陽武侯祠に戻すと、ここが有名なのはいわゆる「三顧の礼」をもって迎えられた当時、諸葛亮は南陽に隠遁していたからである。当時の南陽は全国的な大都会であり経済、文化、科学技術、教育といった面で先進的な地位を築いていた。世界最古の地震計（地動儀）を発明し「科聖」と呼ばれる科学者・張衡（78年生～139年没）（地動儀の模型は南陽武侯祠内の公園にもあった）、漢方の創始者にして集大成者でもある「医聖」こと張仲景（150～154年ごろ生、215～219年ごろ没）らもこの地で生まれて活躍した。

その諸葛亮のことを、曹操に敗れて荊州に逃げていた劉備は司馬徽から教えられ、三顧の礼（三顧草廬）となるのである。南陽武侯祠にはその名も「諸葛草廬」という建物がある（次ページ写真）。なお、そこに掲げられている額は1973年4月に郭沫若かくまつじやくによって書かれたものである。三顧の礼の故事は「三国志」の第37回から第38回に見える。劉備はこうし



諸葛草廬(2012年2月)

て諸葛亮を迎え入れ「天下三分の計」の大構想に開眼させられることになる。

話は脇道にそれるが、現在の南陽市には武侯祠のほか、張仲景を祀った「医聖祠」、古代の絵が彫られた巨大な石（東漢画像石）を収集している「漢画館」といった多くの歴史名所がある。また、時代はかなり下るが北宋の政治家・はんちゆうえん 範仲淹（989～1052）は南陽の鄧州赴任中に「先天下之憂而憂、後天下之楽而楽」という句で日本でもよく知られる『岳陽楼記』を書いた。その執筆場所の書院も「景範坊」として名所になっている（私は2009年11月18日に見学できた）。

脇道ついでに鄧州市郊外の堰子習營村にある「習氏宗祠」をぜひ紹介したい。これは鄧州における習の姓を持った、つまり同じ祖先を持つ父系同族集団を祀った祠である。習姓、つまり、現在の習近平国家主席の祖先である。習近平氏自身は陝西省の生まれで、鄧州とは直接の関係はないが、父親で著名な革命家・政治家であった習仲勳（しゅうちゆうくん 1913～2002）が、生まれはやはり陝西省で、生涯南陽に足を踏み入れることはなかったものの、自分の祖籍（原籍）は鄧県（現・鄧州市）であると明言している。私はこの「習氏宗祠」を2014年12月5日に実際訪れたが、一族から最高権力者が出たということで村全体に期待感が溢れていた。

さて、魏の曹操に話を移そう。現在の河南省許昌市の西の郊外に「はりしやう 灞陵橋景区(景勝地)」という観光名所があり、私は2018年9月1日に行ったことがある。この景勝地は灞陵橋、関帝廟、庭園からなる。許昌と言えば、その一帯は曹操の本拠地・えいせん 潁川郡であり許昌市は当時「許都」と呼ばれていた。曹操はこの地に後漢最後の皇帝・献帝を迎え入れることで実権を掌握

した。そうした曹操のお膝元に劉備の忠臣・関羽の廟が併存しているのは、ちょっと考えると不思議であるが、ここが劉備のもとに戻ろうとする関羽を曹操が追いかけて、あらためて別れを告げた場所であるとわかると納得がいく。

「官渡の戦い」の直前、建安5年（西暦200年）の春、徐州で曹操に対して反乱を起こした劉備は曹操に制圧されて袁紹のもとに逃げ込み、残された関羽は曹操に降伏する。許都に戻った曹操は関羽の人となりを見込んで、礼を尽くして厚遇し、永く自分のもとに置こうと望んだが、劉備に忠心を誓っている関羽は曹操の居城を脱出して、劉備のところへ帰ろうと馬を走らせる。それを知った曹操は関羽を追いかけて、この灞陵橋であらためて戻ってくるよう説得するが、関羽の劉備に対する忠心は固かった。

遺留を諦めた曹操は、関羽に報奨金も辞退されたので、せめて袍（わたいれ）をもって寸志を表そうと、部下を使って手渡そうとするが、関羽は何かの計略かと疑って馬を下りず、長刀の先にそれをひっかけて手元に引き寄せ、身に纏い、馬上より礼を述べるのみであった。無礼千万、との声が聞こえる中でも、曹操は、相手は1人こちらは多勢、と理解を示し、（別れは）一度決めたことと取り合わず、城に帰っていく。「三国志」第27回に見える、いわゆる「灞陵挑袍」の故事である（**下部写真**は「灞陵橋景区」内の「関公辞曹彫塑」）。

曹操と言えば、近年、中国考古学上の一大出来事に触れないわけにはいかない。2009年12月28日、中国中央テレビ局（CCTV）のニュースで曹操の墓の発見が報じられ、大きな話題を呼んだのである。場所は河南省安陽県西高穴村の農地である。その後『発見（発見）曹操墓』という4回シリーズのドキュメンタリー番組も制作された。それによると発見の経緯は



関公辞曹彫塑(2018年9月)

2006年の春節前夜に遡る。恒例の爆竹の音が鳴り響く中で、それとは違う大きな爆発音を聞いた農民がいた。やがて、それは墓荒らしによる爆破であったことがわかる（墓荒らし自体はこの辺りでは珍しいことではないらしい）。そして、その結果、大きな穴ができた。

この穴の下に埋められた遺跡・文物が、果たして保存の価値があるものか鑑定を依頼された河南省考古研究所の副研究員（当時）・潘偉斌氏がその穴に潜ったところ、どうやらかなり大規模かつ貴重な遺跡であることがわかり、そこからその発掘作業が始まった。その後は考古学的な発掘作業と並行して、歴史学者による文献との照合など、さまざまな角度から検討が加えられ、曹操の墓（曹操高陵）であるとの確証が得られたため、2009年末の公式発表となった。

このテレビ番組はその発見に付随する歴史上のいくつかの疑問も取り上げている。その中でとくに興味深かったのは以下のような「仮説」である。この曹操の墓からは壁画や文字が書かれた多量の石板のかけらが見つかった。この石板は厚さが10数ミリもあり、材質は大変硬いものであるにもかかわらず、破碎は徹底的になされており単なる墓荒らしの仕業とは考えられない、というのである。

曹操の没後、やがて魏国では曹爽そうそうを中心とした曹氏一族と、魏の将軍であった司馬懿しばいとの間で内紛が続く。結局、司馬懿はクーデターに成功し、これが司馬炎しばえんによる晋の建国へとつながるのであるが、司馬一族にとって曹一族は憎き宿敵であった。司馬一族の仕業かどうかはともかく、曹操の墓の石碑・石板の徹底的な破壊ぶりは、政治的報復の意味がありそうに思える。この仮説を提起している中国社会科学院考古研究所長（当時）の劉慶柱氏によると、59の石碑を調べたところ、曹操を意味する「魏武王」と書かれたものはすべて粉碎されているが、それが書かれていないものは無傷であった。また、併せて埋葬されていた2人の女性と1人の男性について男性の遺体のみ損傷が見られるそうである。

この曹操の墓の発見は、2019年の7月9日から9月16日に上野の東京国立博物館で催された日中文化交流協定締結40周年記念の特別展「三国志」の中心主題であった。私も7月15日に実際行って見たが「曹操高陵」の一部が原寸大で復元されているなど、



「衰雪」の拓本。特別展「三国志」（東京国立博物館）にて（2019年7月）

世紀の大発見の意義を余すところなく伝えていた（実は、前記の中国中央テレビ局の番組のDVDはこの展覧会で購入したもの）。

ところで、この展覧会には曹操の筆になるとされている陝西省漢中市石門隧道にある摩崖石刻「衰雪」という二文字の拓本が出品されていた（上部写真）。これは、まるで雪のように水しぶきを上げる流れに臨んで詠んだ作と言われている。部下がなぜ、サンズイがないのかと尋ねると（本来は「滾」一たぎるの意一が相応しいと考えられる）、曹操は、傍らほうらを流れる褒河ほうがを指さして「これは水ではないのかね」と答えたと言い伝えられている。

このことに関して、『人民日報』（海外版）に楊立新氏が「漢字故事」として興味深い文章を書いているので、今回の最後に紹介したい（2016年11月15日付）。上述の解釈によると、曹操はもともと文字遊びを好み、わざと書き間違えたということになる。因みに、「滾」が大量の水の奔流の意味であるのに対して、「衰」は古代君主の礼服を指す。氏によると、上述の解釈は作り話だろうということである。なぜなら、漢魏時代には「滾」という漢字はまだ存在せず、「衰」は初文（生まれた当初の字形）であって、その後も両者はいわゆる古今字の対をなして、どちらも通用したそうである。その例として杜甫とうふ、洪邁こうまい、蘇東坡そとうばの文章から引かれている。

さらに、残念ながら、石門隧道の「衰雪」自体、曹操の筆になるものでなく、後世の作である可能性が極めて高いという。その理由は、その字体と当時使われていた字体が異なる点である。曹操によるとされる「衰雪」の字体は隸書のように隸書でない。楷書に慣れた人によって書かれた「隸書」である。そして、曹操の時代には楷書はまだ未成熟であった（隸書の後に楷書は創られた）。2番目の理由としては、「魏王」との署名は後から彫られた痕跡がある点があげられている。

テレサ・テン（鄧麗君）—(下)

和田宏

国民党軍人家庭に育ったテレサには、強い愛国意識、国民党政府が唱える“ただ一つの中国”への忠誠心があり、それが長所であり、欠点ともなりました。逆に北京政府・中国共産党からは“危険人物”として睨まれ、彼女の歌は“黄色歌曲”として蔑まれました。北京と上海でのコンサートは中止になってしまったのです。その替わり、テレサは台湾内では“軍人の恋人（軍中情人）”と言われる程、人気があり、国民党軍の軍服を着て、各地の軍施設を慰問して周り、熱心に歌いました。その時が一番幸せだったと語っています。台湾政府から褒章も受章しました。

ところで、テレサのロマンスはどうなっていたのでしょうか。テレサは、1980年代は香港を拠点に活動していましたが、26歳の時、マレーシア華僑の実業家の御曹司・郭孔丞と交際し始め、互いに好意を抱いて1981年には婚約発表までしたものの、歌を止めて家庭に入ると言う相手側の結婚条件をテレサが拒否し、1985年婚約解消になりました。

テレサは、1989年の第2次天安門事件以降、民主化運動家が大勢亡命したパリに本拠地を移しました。自作の詩に曲を付けて歌おうなどと脱皮を模索しつつも、無力感に陥り、茫然自失となっていたその矢先、1990年パリで出会ったのが、自称カメラマンを目指すというその日暮らしのフランス人の男でした。ステファン・ピエールと名乗るモカブラウンの瞳に輝くブロンド長髪の23歳。ステファンは、テレサが高名な歌手であることなど全く知りませんでした。“何て可愛いのかしら、お人形さんみたい！”と、37歳のテレサの方から熱を上げました。テレサの一番の弱点は男を見る目が無かった事です。

この男と6年間同棲。彼女は1995年5月8日、静養先のタイのチェンマイでホテル住まいをして



1981年、金門島で軍隊を慰問

いた折、持病の喘息をこじらせ、部屋から出て来て廊下で倒れました。男は外出していて治療が遅れ、テレサは帰らぬ人となりました。享年42。

彼女の葬儀は、蒋介石・蔣経国以来の台湾の準国葬が台北市で行われ、中華民国旗と国民党旗に覆われた棺が移動した沿道を、日本から来たファンも含めて3万人が埋めたとされています。海に見える新北市の『鄧麗君記念公園』には黄金色の銅像も立っており、公園に足を踏み入れると彼女の歌声が自動的に流れる仕組みになっています。

大陸出身の両親と台湾生まれのテレサは、両国を結びつけようという夢を希求しながら、それが実現しませんでした。母国台湾と祖国中共の狭間で、何とかその狭間を埋めようとして埋められなかった。生まれた台湾にも住まず、父母の生まれた大陸にも行けず、晩年はパリやタイのチェンマイで14歳年下のろくでもない男と同棲したテレサは、カメラを向けられるとVサインをしながら寂しげに微笑むのでした。私は、テレサより7年前に生れ、テレサの死後25年も生きています。

嗚呼～！ 彼女は何と可哀想なんでしょう。

1977年リリースされた“ふるさとはどこですか”



テレサ・テンとステファン・ピエール

という彼女の歌があります。中国語では“小村之恋”と題され、テレサは日中の両国語で歌っています。その中国語の歌詞が抜群に美しい！川と山、空と花、美しい村、美しい景色などと対（つい）になったり、脚韻を踏んだりしています。私がカラOK店で歌った時、兄は『いい歌だね。宏ちゃん上手いね〜。』と褒めてくれたのです。その兄も今は亡き人となりました。

『小村之恋（ふるさとはどこですか）』

作詞：庄奴

作曲：薄井須志程

湾湾的小河

青青的山岡

依偎着者小村莊

（くねくねと曲った小川青々とした山それらが小さな村に寄り添っている）

藍藍的天空

陣陣的花香

怎不叫人為你向往

（藍色の空芳しい花の香りどうしてあなた“故郷”を慕わずにいられましょうか）

哈，問故郷問故郷

別來是否無恙

（ああ、故郷に尋ねます 別れて以来あなたは恙無かったですか）

我時常

時常地想念你

我願意我願意

回到你身旁

回到你身旁，

（私はいつもあなた“故郷”を想い、あなた“故郷”のもとに帰りたいと願っています）

美麗麗的村莊

美麗的風光

你常出現我的夢想

（美しい村美しい風景あなた“故郷”はいつも私の夢に出て来ます）

台詞：

在夢里，我又回到了我難忘的故郷，

那湾湾的小河，陣陣的花香，使我向往，使我難忘

（夢の中で私は忘れ難い故郷に又帰っていま

したあの曲がりくねった小川芳しい花の香り

私をして向かわせ私をして忘れ難いものにするのです）

難忘的小河 難忘的山岡 難忘的小村莊 在那里歌唱 在那里成長 怎不叫人為你向問往

（忘れ難い小川忘れ難い山忘れ難い小さな村

そこで歌を歌いそこで大きくなりました

どうしてあなた“故郷”を慕わずにいられまし

ょうか）

テレサ・テンの透明感溢れる伸びやかな歌声は、全ての人から愛され、永遠に響き続けるでしょう。



zhī zhī wéi zhī zhī bù zhī wéi bù zhī shì zhī yě
「知之為知之、不知為不知、是知也」をどう理解しますか？

後藤 芳昭

この句は、言うまでもなく論語の巻第一為政編にある句で、孔子が弟子の子路に論じたものです。「これを知ったことは知ったこととし、知らないことは知らないこととする、それが知るということである」と解釈する書が多く、その趣旨は「自分の知っていることと知らないことの区別が肝要」と説明しています。

今年逝去された中国文学者・井波律子先生¹⁾は、著書「論語入門」の中でこの句を、

〈子路（孔子より9歳年少、孔門では年かきの弟子。もとは遊侠の徒で孔子にからみに来て論破され、心服して門に入った）の生い立ちから説き、豪快な子路は深く考えず、見る前に跳べとばかりに暴走する傾向があった。だからこそ知ったことと知らないことを区別し、整理することが必要だと説き聞かせた。〉

と書いています。

フランス文学者・桑原武夫先生²⁾も、著書「桑原武夫集 9 卷論語」の中で、率直勇敢な情熱家で孔子に愛された子路から説明し、この句は文字通り素直に読んでおくべきであり人生における最も立派な教えの一つであると書いています。また、簡野道明氏³⁾の「之」を「道」とする見方や、「人」の意味にとる荻生徂徠⁴⁾もいるがこれらは行政的な読み方に偏しすぎるといふべきだ、と紹介しています。

今回私が紹介したいのは、元台湾師範大学教授・曾仕強⁵⁾の読み方です。これは著書「易経的奥秘」(陝西師範大学出版社)の中にあります。要約すると、〈孔子の教えはそもそも曖昧である。

論語もみな短い一句で、始まりも終わりもない。この一句も然りでこの後には何の補足の句もない。文字通りの読み方は孔子を矮小化している。そのような読み方をすれば、論語全部が役に立たない話をしていることにならないか？ この句の意味は、「貴方が知っていることでも、貴方に問うた人が知るべきではないと思ったら知らないとしなさい。相手によって異なる対応をしなさい」であると。〉

以下に私見を述べます。曾教授説に従い冒頭の一句を読み返すと、「知っている人には知っていることとし、知らない人には知らないままにするのが、知っていることなのだ」ということになります。そうすると血気盛んで遊侠肌の子路に、自分の知の区別(自分はどこまで知っているか)ではなくて相手の知を区別し対処するように論じたことになると考えられます。孔子は子路への言葉だけではなく、孔門の他の弟子たちにも論じたかったのでは。だから論語の中の為政編に載せたのではないのでしょうか？

中国語に「見仁見智」(仁者は仁を見、智者は智を見る。=人はそれぞれ異なった考えを持つ意)との言葉があります。これは、易経の「仁者見之謂之仁、知者見之謂之知」から来ています。上古からの易経を通読し、最終的に完成させた孔子は、子路に「知」の本質を語ったのには、この背景があったのではと思います。

曾仕強教授は、自説の後、同書に次の故事を紹介しています。教授が孔子の生家の曲阜(山東省)で聞いた話です。

《ある日孔子の弟子が門の外を掃いていまし

た。その時一人の客人がやってきて弟子に聞きました。

「あんたは誰だね？」

弟子は自慢げに答えました。

「私は孔子の弟子です。」

客人は、「それは良かった！ では一つ教えてもらえますかな？」

弟子は喜んで言いました。「いいですとも！」

とはいえ、心中なんか変なことでも聞いてくれるのだろうと思いました。

客人は、「一年には季節は何回やって来るものですか？」

弟子は心中、こんな問題聞くまでもないと思いつつ、いながらすぐに答えました。

「春夏秋冬の四季だよ」

すると客人は頭を横に振りながら答えました。

「間違ってるよ！ 一年には三季しかないよ」

「いやあ！ 間違ってる。四季だ」

「三季だ！」

ついにどちらも引き下がらず、しまいには賭けをすることになりました。もし四季なら客人が弟子に頭を三回地面にぶつけ礼をする、三季なら弟子が頭を三回地面にぶつけ礼をすることにしました。(地面に頭をぶつけるのは、師と仰ぐ行為)

弟子は、今度は自分が勝つに決まったと思いつつ、客を案内し孔子先生を探しました。折よく先生が教室から出てこられたので尋ねました。

「先生、一年に季節は何季ありますか？」

先生は、客を一目見て答えられました。

「一年には三季じゃ」

弟子は驚いて昏倒しそうになったが、とても問い直せませんでした。客人はすぐに「三回頭を

地面にぶつけろ！ ぶつけろ！」と言ったのでやむなく頭をぶつけ礼を行いました。

客人が去った後、弟子はやむに已まれず先生に聞きました。

「先生、一年が四季なのは明らかなのになぜ三季とおっしゃったのですか？」

先生曰く「お前は先程の人は体全体が緑色だと見えなかったのか？ あいつはイナゴで、春に生まれて秋にはすぐ死ぬのだ。冬などは見たことも無いのだ。お前が三季と言えばきっと納得するのに、四季と言ひ張れば夜までさわりでも埒が明かない。お前が割を食って三回礼をしても問題ないじゃろ」》と。

曾教授は、三季人には三季人、四季人には四季人の対応するのが「是知也」としたのです。他にも違った解釈があるかと思いますが、賢明なる皆さんは如何お考えですか？

■注釈

- 1) **井波律子**：1944年富山県生まれ。中国文学者。京都大学で中国文学を専攻。碩学・吉川幸次郎の最後の教え子。「三国志演義」、「水滸伝」、「世説新語」の個人全訳などに取り組んだ。2020年5月没 76歳
- 2) **桑原武夫**：1904年福井県生まれ。仏文学者。京都大学で仏文学を専攻。フランス文学研究に多大な業績を残すと共に、日本文化、現代文明に鋭い評論活動を続けた。文化勲章受章者。1988年4月没 83歳
- 3) **簡野道明**：1865年、江戸八丁堀で伊予国吉田藩（現・宇和島市）藩士の子として生まれる。漢文学者、言語学者、教育者。「漢文読本」や「故事成語大辞典」などの編集を担当。1923年に漢和辞典「字源」を編集し刊行した。1938年没 73歳
- 4) **荻生徂徠**：寛文6年（1666年）江戸で生まれる。江戸中期の儒学者、思想家、文献学者。古文辞学を確立した。徂徠の号は、詩経の「徂徠之松」に由来する。1728年没 62歳
- 5) **曾仕強**：管理哲学者。1935年中国福建省生まれ。台湾師範大学教授。中国の経営管理、胡雪岩の商い分析、易学の研究に貢献。2018年没 83歳

中国の面白い神話物語(1) キョンシー編 顧傑

わんりいの皆様、初めまして。私はいつもお世話になっております、顧傑(顧杰)と申します。略歴は最後に載せましたのでご覧ください。過日、寺西さんから日本に滞在した証としてわんりいに寄稿したらどうか、とのお話がありました。色々考えましたが、民話や面白い神話(主に中国)などを題材にして語ろうかと考えています。

最初は「ゾンビ」からお話しようと思います。ゾンビ、英語表記ですと ZOMBIE で、「生ける屍」とのこと。西アフリカやカリブの民間信仰の中では、シャーマンや司祭によって呪術で蘇らせた「奴隷化された死体」を指しています。似たものとして中国では「僵尸(殭屍)^{注1)}」と呼ばれるものがありますが、その由来やあり方はまた前述した西アフリカやカリブの信仰とは違う形になっています。が、それはさておいて、「ゾンビ」は近代創作物(小説、映画、ドラマなど)では理性のない残虐な怪物として描かれていますが、その「ゾンビ」が、中国の神話などにおいては、頑張れば「神様」、あるいはそれに近い存在になれることをご存知でしょうか? 有名な慈悲と知恵の存在「観世音菩薩」のペットは、金毛狐と言います。掲載した絵のようにその背中に乗っているのが観世音菩薩です。この金毛狐は、「頭が龍に似て、獅子の体に麒麟の四つ足がつく。火を体にまとい、翼は無いものの飛ぶことが出来る。非常に凶暴であり、龍の脳を食べるのを好む」もので、さらにその強さは次のように言い伝えられています。《清朝、康熙年間、三日間にわたり、蛟(龍の一種)3匹と龍2匹が一匹の狐と死闘の末、蛟2匹と龍1匹は死んだものようやく狐を討ったという》

そして何言おうこの狐は、正にキョンシーが学

問に励み修練を積んだ末の姿ではあります。中国のキョンシーは、以下に述べる経過からある程度の理性が保留されていると言われています。

まず修練を重ねたキョンシーは血と肉が消え、骨に異様な紋が現れます。百年後、異様な紋から白い毛が生え500年後黒くなります。さらに500年後黒い毛が金色になって行くのですが、ここからが大事なことになります。続いて1000年後、天地の理によって「雷劫」の洗礼を受けることになります。現世に有るまじきものが誕生することを、神聖なる雷によって浄化する目的ではないでしょうか。ほとんどの生き物はこの「雷劫」によって灰になるはずですが、この試練を生き延びたものは「天地が認める」ことになり、神様こと「仙(人)」になれるわけです。キョンシーも然り。「雷劫」から生き延びたキョンシーは晴れて「金毛狐」になれるわけです。「金毛狐」は、その字の通り金色の毛で覆われています。ただ首の付近に少しだけ白い毛が残っています。そしてその白い毛の部分は、「金毛狐」の弱みなのです。ある意味では必死の努



「観世音菩薩」のペットは「金毛狐」(搜狐から)

力をすればきっと無駄にはならない、ということの諭しなのではないでしょうか。

さて、「金毛狐」は、中国の仏教と道教両方の創作物から見ることができます。それは他ならぬ「西遊記」(仏教)と「封神演義^{注2)}」(道教)からです。よく知られているのは、「西遊記」の第71回において、孫悟空が麒麟山で倒した「賽太歳^{さいたいさい}」は、観世音菩薩のペットになることが出来た金毛狐ですね。また同じ中国の明朝に書かれた「封神演義」の第83回における「慈航道人」のペットも同じく金毛狐になります。そもそも「観世音菩薩」と「慈航道人」は同一人物である可能性もあるのです。

実は、神話や創作物だけではなく、現実にも「金毛狐」の姿を見ることが出来ます。それは「華表^{かひょう}」(華表^{huá biǎo})です。華表は、中国の太古・堯舜時代から存在しています。当時の皇帝は、良い皇帝になるために大きな木の棒を地面に立て、民が皇帝に対する意見や不満をそれに書かせていました。時代が下って、この棒が民族を代表する象徴になり木の棒から大理石の彫刻になって行きました。よくご覧になると龍と瑞雲模様の上に「狐」が鎮座しています。

清朝の「故宮」には、3本の華表が立っています。天安門外の本の華表に座っている「狐」は、「外」を向いています。これは国の権力者に遊びの心を収め、早く戻って国の正しい統治をするよう催促



天安門前の華表 (新浪網から)

しているのです。その意を以て「望君帰」とも呼ばれています。故宮の後側には二本立っており、前一本と違いこちらの「狐」は「中」を向いています。これは権力者に女色に惑わされず、民の状況を自分の身をもって察するように促しているのです。その意を以てこちらは「望君出」とも呼ばれています。華表はそのほかに昔では道しるべの効能や、時間を表す機能もあります。

そのような華表の上に鎮座している「狐」は、まさか生まれ変わったキョンシーであることを誰が想像できたでしょうか。ある意味、2000年以上努力し続けたキョンシーに敬意と賛美を与えているのではないのでしょうか。

「狐」は龍王の子であり凶暴な怪獣などの説もあります。本文では、単純に「キョンシー」の側面やそれに関する伝説から話しましたので、興味のある方は是非ほかの神話物語を探してみてください。(続く)

■注

1) キョンシー(僵尸): 広東語音での呼び方で、北京語音ではジャンシーとなる。ある資料には中国の妖怪で、いわば中国版のゾンビであり道士の手によって儀式が行われキョンシーにされたもの、とある。元来地方労働者が出稼ぎ先で死んだ場合、その遺体を故郷に送り届けるために道士が術を施して歩かせたのがキョンシーの始まりという説も有る。(ウイキペディアより抜粋)

2) 封神演義: 明代に成立した神怪小説。史実の殷周易姓革命を舞台に仙人や道士、妖怪が人界と仙界を二分して戦争を繰り広げるスケールの大きな作品。中国大衆の宗教文化・民間信仰に大きな影響を与えた。著者は許仲琳(明朝の小説家)と言われるが定説はない。

(ウイキペディアより抜粋)

■顧傑さんのプロフィール: 中国・大連市の出身。2011年日本に留学。国士舘大学を経て早稲田大学大学院を卒業、専攻は情報通信。中国不動産の日本支社で、主としてアニメについての仕事に携わっている。

■第 154 話 それぞれに筋が通っている

先生が生徒に訊きました：「1 足す 1 は全部で幾つになりますか？」

生徒甲：「全部で 3 です。」

生徒乙：「全部で 1 です。」

生徒丙：「無くなりました。」

先生はそれぞれの生徒に答えの理由を訊きました。

生徒甲：「兄が一人いて、昨年結婚して今年子供が生まれました、それで 3 になりました。」

生徒乙：「おじが一人います。昨年結婚しましたが、今年離婚しました。現在は一人です。」

生徒丙：「学校に上がった時、パパが一元くれました、ママも 1 元くれました。でも二つとも落としてしまいました。それで、現在はゼロです。」

■第 155 話 一番重い物

物理の時間、先生が冬冬に訊いた：「どんな物体が一番重いかナ？」

冬冬：「母方のおじいさんが一番重いです！」

先生はちょっと不思議に思って訊いた：「どうしておじいさんが一番重いのか？」

冬冬は真面目に答えた：「パパは手紙を書く時、いつもお爺さんのことを『泰山』と読んでいます。泰山ってすごく重いでしょ！」

■第 156 話 熱による変化

物理の時間、物体は熱すると膨張し、冷やすと縮む現象を説明し、学生にその例を挙げるよう求めると、一人の学生が立ち上がって答えた：「夏は気温が高いので一日は長く、冬は寒いので一日が短いです！」

■第 157 話 リンゴを摘むのに最適な時

村の学校である日、校長先生が生徒達に話をした。

校長先生：「一年には春・夏・秋・冬の四季があります。春には樹木の緑がよみがえり、野原一面には花が咲き、鳥が巣を作り始めます；夏は暑く果物が実をつけ始めます；秋は木々の葉が黄色く色づき、雨風の多い季節です；冬は昼が短くて夜が長く、気温は低く、

野原は雪で真っ白に覆われます。」

話を聞いた子供が友達の雅克に訊ねた：「リンゴを摘むには何時が一番良いと思う？」

雅克は間髪を入れず答えた：「そりゃあ雨の日が最適だよ！ 雨の日は番人も部屋の中だし、犬も外には出ていないから！」

■第 158 話 宏ちゃんの疑問

小宏がおじいさんに訊きました：「おじいちゃん、僕はどうしてあなたのことをおじいちゃんと呼ぶの？」

おじいさん：「それはね、私には髭があるからさ！」

小宏：「家で飼っているヤギは顎に髭を生やしているけど、僕はおじいちゃんと呼ばないよ！猫だって長いひげを持っているけど、猫のことおじいちゃんとはいわないよ！」

おじいさん：「馬鹿だなあ。ヤギも猫も動物だからだよ！」

小宏：「僕のおじさんは人間ですよ。去年大学に入ったばかりで、時々無精ひげがおじいさんより長

くなるけど、僕はおじいさんとは呼ばないよ。どうして？」

おじいさん：「……。」

■第 159 話 道を探ねる

ある人が、一人の子供に訊ねました：「坊や、この二つの道はそれぞれ何処に通じているのかナ？」

坊や：「東の道は僕の家に通じています。でも西の道は僕の家には通じていません、」

■第 160 話 誕生日

一人の教授が、非常に賢いと言われる 6 歳児に知能テストを行いました。テストは自由な会話の中で行われました。

教授：「君の誕生日は何日だい？」

子供：「2 月 20 日です。」

教授：「何年の？」

子供：「毎年！」



今月から、わんりいは皆さまのページを設けます。わんりい誌面に対する皆様のご意見、ご異見、ご批判、或いはお手持ちでご自慢の旅の写真などをここでご紹介出来たらと考えています。

このページのスタートアップとして、四川省で四姑娘山自然保護区管理局特別顧問としてご活躍の大川健三さんのメールをご紹介したいと思います。実は、大川さんは今まで毎号ご覧になっていたの、感想をお寄せくださっています。

以下は10月号をご覧になっていたの感想です。

四姑娘山の川です。

'わんりい 2020年10月号'を大変面白く拝読させて頂きました。

表紙で四姑娘山界隈に住む少数民族の写真を紹介して下さい、ありがとうございました。他の写真3枚も宜しく願い申し上げます。

「退職ジャンボ機長の回想-最終回」で失敗談等をご披露下さり、大変ありがとうございました。何十年も機長をされていると、こんな事も有るのかと驚くと共に人間味も感じてホッとする面が有りました。機会がございましたら、「当たり前」とお思いのお仕事ぶりをご紹介して下さい、読者は興味津々で面白く拝読させて頂けるのではないかと思います。

「中日辞典からの意外な発見」は、私には難しく感じられて自分の中国語のレベルの低さを痛感させられ、大変勉強になりました。

次号を楽しみにしております。

大川さんの感想をご覧になって、皆様の感想はいかがですか？同感される方も、違った感想を持たれた方もいらっしゃるでしょう。

今回お届けする11月号の感想を、メール或いはハガキで代表宛てにお聞かせいただくと嬉しいです。広場に掲載させていただくには匿名でも、ペンネームでも結構ですが、事務局には本名をお

知らせください。掲載にあたって、ご連絡しなければならないこともあります。「誌面を読んだの感想」というのは、あくまでもヒントの一つです。ほかの方に紹介したい本や映画の案内でも結構です。ちょっと思い付いて200~300字書いてみたというのも結構です。皆さんにお知らせしたいとか、どなたかに伺ってみたいとかいう時にもこのコラムをお使いいただけます。

With coronaの時代にわんりいも何かできないかと思い、始めてはみたものの、このページは皆さまのご協力がなければ続けられません。皆様のお考えをどしどしお寄せください。

~~~~~

早速一つお知らせがあります。

わんりいの発足当時から続いていた、「鶴川水墨画教室」がコロナの影響で休講になります。大変残念ですが、この状況下では致し方ありません。

講師の満伯先生は淵野辺にも教室を持っていますので、興味のある方は、下記にご紹介する淵野辺教室を覗いてみてください。

## 満伯画伯の【水墨画教室】 淵野辺教室

●時間 第2第4土曜日 午後2時~4時

●場所 大野北公民館

住所 相模原市中央区鹿沼台1-10-20。

JR 横浜線淵野辺駅南口徒歩1分

(駐車可、無料)

体験費 2000円

●問合せ 満伯先生 080-5017-9518



## 【わんりいの催し】

### ♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体のを抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター!!

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：11月17日(火) 10:00~11:30  
12月22日(火) 10:00~11:30
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：1,500円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

❀❀ 中国語で読む 漢詩の会 ❀❀

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！

録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：11月29日(日)
12月13日(日)
いずれも10:00~11:30
- 講師：植田渥雄先生
桜美林大学名誉教授
現桜美林大学孔子学院講師
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp

(有為楠)

■11月定例会

▼11月11日(水)13:30~
三輪センター 第三会議室

■‘わんりい’ 発送

▼12月号発送は11月30日(月)10:00~
三輪センター 第二・第三会議室

—— 編集後記 ——

最近のコロナ感染者数はヨーロッパで再び、爆発的に増加しています。アメリカやインドの増加も相変わらずですし、新型コロナウイルスは世界を席卷しています。ウイルスの発祥地とされる中国は、早々に爆発的な蔓延を乗り越えましたし、日本は幸いに爆発的な蔓延を免れています。これには何か理由があるのでしょうか？山中伸弥博士が指摘されるように「ファクターX」があるのかもしれませんが、それが何なのかは未だ解明されていません。コロナに関するウイルスの研究・治療法の発見・ワクチンの開発などは、国ごとにするよりも、世界中が手を組んで進めれば、成果が早く得られるでしょう。世界中の国々が気持ちを揃えてウイルスの撲滅に成功し、更に進んで国同士の争いなんてばからしいと気が付いたとしたら、コロナ禍もあってよかったのだと思えるのですが、世の中、そんなに甘くはないですね。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい

9月以降の入会は、当年会費1100円。

■問合せ：044-986-4195 (寺西)

### ‘わんりい’ 258号の主な目次

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 寺子屋・四字成語(37)呆若木鸡                  | 2  |
| 「日译诗词」(7) 孟浩然的五言絶句・二首             | 3  |
| 「漢詩の会」だより(42) 岑参の『磧中の作』と『入京の使に逢う』 | 4  |
| 中国の歴史を彩る美人百花(4)                   | 7  |
| 「中原」雑感(7) 「三国志」と河南省               | 9  |
| テレサ・テン(鄧麗君)(下)                    | 12 |
| 「知之为知之, 不知为不知」の意味は                | 14 |
| 中国の面白い神話物語(1) キョンシー編              | 16 |
| 中国の笑い話-46                         | 18 |
| 「みんなの広場」新設のお知らせ                   | 19 |
| ‘わんりい’の催し・入会案内                    | 20 |